

よつや動物病院を訪ねて 動物医療でのMRI導入から アニマルSCOTへの展開へ

編集委員 伊藤 陽一



よつや動物病院 外観



よつや動物病院は富山県高岡市に、ともに獣医師の和田院長ご夫婦が2012年に開業され、順調に地域の動物医療に貢献され、その後昨年8月に北陸初の動物医療用MRIとしてAPERTO^{®1}(0.4T、株式会社 日立製作所製)を設置された先進的な動物病院です。今回動物医療へのMRIの有用性と人間の医療との関係を探り、さらに東京女子医科大学との連携で診断のための単独のMRIから現在AMED^{®2}(国立研究開発法人 日本医療研究開発機構)のプロジェクトで開発中の手術のための周辺機器を含んだ治療室全体の最適化を図るスマート治療室SCOT(Smart Cyber Operating Theater)の動物版「アニマルSCOT」への展開についてもお聞きしました。

○動物医療を取り巻く環境と「よつや動物病院」

動物病院：全国で10,000施設を越えているが歯科医院と同じく充足が始まっていて、特に、首都圏では差別化(健康診断など)を模索しないと経営的に厳しくなりつつある。

人間の医療から20年遅れていると言われていたが、動物実験などによる人間の医療への貢献では医学と獣医学の連携があり、さらには動物病院では差別化のために画像診断装置導入などもあり一部は先進医療も始まっていて急速に進化している。

獣医師が診る対象は「脊椎動物」全般で多岐にわたるが動物病院では犬、猫が主体。

獣医師は人間相手の医師と異なり、多くの診療分野を一人でこなすことが多いが、そもそも哺乳類はDNAの97%が人間と同じで、共通する疾患も多いので近年は専門化され、複数の獣医師がチームを組み診療することも増えている。また動物医療保険も確実に増えていて、飼い主様へのニーズやサポート体制も充実してきている。

富山県の動物病院数は約45施設で、高岡市には8施設がある。車の便が良い郊外に集中する傾向があり、一番新しい施設として「よつや動物病院」が生まれた。

和田章秀(わだあきひで)院長は神奈川県川崎市の生まれで鳥取大学農学部獣医学科獣医外科学教室卒業後、5年間を東京女子医科大学 先端生命医学研究所 先端工学外科学分野^{*3}(Faculty of Advanced Techno-Surgery、以下FATS)で学ばれ博士号を取得されています。その後複数の大学、動物病院などで放射線学や手術の経験を積み、2012年に同じ鳥取大学で学ばれ、獣医になられた奥様の実家の高岡市にてご夫婦で開業され、地域動物医療に情熱的に取り組まれなが

ら今でも最新の動物医療技術の習得に向け研鑽されています。それでは以下、和田院長にお聞きしていきます。

○まずはMRI導入についてお尋ねしました。

伊藤：開業から早期にMRIを導入され、その動機としてホームページには「脳の病気にMRIがあれば助けられた動物たちがいたのではとの思いがあり、北陸の動物医療に貢献したい」というような言葉がありました。実際稼働し始めてからの感想はいかがでしょう。

院長：10カ月間で150件ほど使用しています。犬が多く、残りは猫で圧倒的に頭部疾患(てんかん、脳炎、腫瘍)と椎間板ヘルニアの症例になります。

頭部はT₁、T₂、造影T₁、FLAIRが基本撮像種類になりますが、今後は脳梗塞のためにT₂* (ティーツースター)も撮りたいと考えています。

特に口腔内の出血は歯からなのか、鼻からなのかがMRIでわかることがあり、犬は鼻が長いので結構利用することが多いです。また、椎間板ヘルニアなどは手術前にMRI検査をして終わりではなく、術後のMRI画像も必ず撮るようにしています。全体的に導入前の期待には十分応えてくれていると思います。もっと使用してほしいくて安価な検査料に設定しているくらいです。

伊藤：MRI導入による飼い主様や同業の動物医療に携わる先生方からの反応はどうか。



MRIの前で院長と副院長

院長：飼い主様からは評判が良く、不要なMRI検査でも撮ってほしいと言われてかえって困ることがあるくらいです。説明しても、どうしてもと言われれば別ですが基本的に経営面を優先した過剰検査はしたくないですね。また共同利用の促進を考えてMRI導入の案内を地域の動物病院の先生方に回しましたが反応があったのは懇意にしている金沢の先生くらいで、やはり同じ地域は難しそうですね。

伊藤：MRIやCTなどは今後動物病院で増えていくのでしょうか。

院長：現在、県内にはCTが2台設置されていて、必要対象の動物疾患からは充足していると思います。また、金沢市内ではCTは3台導入されています。広告面から考えると、CT・MRI導入の宣伝効果は大きく、ある施設がCTを入れたことではやっていると周りの施設でも導入したがる傾向があるようです。つまり、臨床的側面でなく経営的側面が大きく、購入できる資産力を含めまだまだ増えると思います。実際MRIを入れてクチコミ効果や差別化効果は感じています。MRIがあることで漠然と設備が整っていると考え、それだけの設備を導入する院長は優秀であるとみられる。開業時には無かった初診からの飼い主様の態度の変化を実感しています。

○次にMRI導入につながるきっかけとして東京女子医科大学（FATS）で学ばれた経験が大きいと思い、さらには、これか

らもアニマルSCOTとして連携されると考えて大学院時代から現在までについてお聞きしました。

伊藤：FATSで社会人大学院生として博士号を取得されていますが、FATSを知るきっかけと実際に学び始めてからの印象などをお聞かせください。

院長：当時は毎日の臨床でまったく余裕の無い時でしたが鳥取大学の恩師である岡本教授、就職先の杉並犬猫病院（現：東京動物医療センター）の石井院長の勧めで、若いうちに新しいものを見ておいたほうが良いとのことで紹介されました。

人間では珍しい病気が動物ではポピュラーな場合があり、研究がしやすい側面もあり人間の医療の発展には動物実験が必要です。獣医師の大学院生は自分がFATSでは初めてであり、そのための麻酔などでは少しは貢献できたと思いますが、1年目に毎水曜日朝の勉強会に参加して、人間医療と動物医療の医療技術のギャップに驚きました。

伊藤：FATSでは集束超音波治療（HIFU）にも関わっていらっしゃいますが今後日々の動物医療に取り入れていかれるのでしょうか。

院長：まだ動物病院では1～2施設しか導入されていないと思いますが、腹腔内の腫瘍の治療を対象に将来的に導入できるならば行いたいと思います。

伊藤：地域動物医療への貢献と研究に対する情熱は異なる



アニマルSCOT



実際のMRI撮影準備^{*1}

側面もあるかと思いますが、どのように取り組んでいこうとお考えでしょうか。

院長：昔から自分は社会的貢献をしなければいけないと考えてきました。地域動物医療へのサポートと動物医療全体の発展はともに社会貢献につながるものと思います。経営的なことも大事ですが、やはり新しいこともやっていきたいと考えています。

伊藤：具体的にMRIの使い方として、アニマルSCOTへの展開があると思います。将来の展望をお聞かせください。

院長：FATSの村垣教授からも言われていることですが、診断がついても治療しないと人も動物も救えません。そのためにはMRIを中心に特化した治療室が必要になります。それがアニマルSCOTであり、今後、FATSや鳥取大学などと連携して進めていきたいと思っています。スタッフの負担は増えますが、今後、症例を重ね学会等でも発表できるようにしたいと考えています。

よつや動物病院のホームページの中の診療方針には「優しく」「誠実に」「情熱を持って」「命を守る」の4つのテーマが掲げられています。実際にお会いした和田院長のお人柄もまさしく「優しさ」「誠実」「情熱」を強く感じさせられるものでした。生まれ育った土地を離れ、獣医を志してからの多くの人との出会いを大事にして北陸の地で開業されましたが、熱心に日々の診療をこなされ、なおかつ今でも新しい分野にチャレンジする姿勢には頭が下がります。これも好きな魚が美味しく、住みやすい県の上に位置する富山県に住み夫唱婦随で仕事ができる環境の為せる業かもしれません。少し羨ましい気持ちになりながら北陸新幹線で帰路に就きました。

東京女子医科大学 先端生命医学研究所 先端工学外科学分野 村垣教授からの一言

オープン型のMRIは開口部が広く、体型やサイズがヒトと異なる動物のMRIには最適だと思います。診断のみならず手術含めた治療支援として展開することで、獣医療界に貢献できると確信します。東京から指導できる環境を整備しますので和田院長のご協力をお願いするとともに、「アニマルSCOT」として今後の発展を期待します。



東京女子医科大学
先端生命医学研究所
先端工学外科学分野
村垣善浩 教授

- ※1 APERTOおよびAPERTO Inspireは株式会社 日立製作所の登録商標です。
- ※2 AMEDは国立研究開発法人 日本医療研究開発機構の略称および登録商標です。
- ※3 東京女子医科大学 先端生命医学研究所 先端工学外科学分野 ホームページ <http://www.twmu.ac.jp/ABMES/FATS/ja/aboutus>



左から副院長、院長、鍋木さん(東京女子医科大学担当社員)、筆者